

令和7年度第2回循環型社会推進会議 議事要旨

1 日 時 令和8年2月20日（金）14:00～16:00

2 場 所 城南衛生管理組合 事務所棟 大会議室

3 出席者

（委員）

郡嶋孝委員長、北川秀樹副委員長、岸敬子委員、嶋繁行委員、原保彦委員、竹元佑太委員、渡邊桂子委員、生駒智史委員、八木英夫委員、家村咲栄委員、岩瀬剛二委員、森川英二委員、松峯茂委員、田邊晴美委員、山下正則委員、谷口浩一委員、岡崎朋二委員、梶原哲郎委員、中村浩二委員、奥山英高委員

（事務局）

野村賢治専任副管理者、山本晃治総務部長、川島修啓施設部長、橋本哲也総務部次長、五十嵐正和循環型社会推進課長、別所尚紀広報協働課長、川戸辰也施設課長、福山さやか循環型社会推進課主幹、森田千絵広報協働課主幹、園田真里子施設課主幹、宇治田唯循環型社会推進課主事

4 議事次第

- 1) 開会
- 2) 委員長あいさつ
- 3) 議事
 - (1) 令和7年度の取組について
 - (2) 最近の他団体取組事例について
 - (3) 当組合における目標
- 4) その他報告事項
- 5) 閉会

5 会議概要

1) 会議の開催にあたり、郡嶋委員長から挨拶がなされた。

皆さん、こんにちは。年度末の大変お忙しいときにお集まりいただきまして、ありがとうございます。

今日の議論は、引き続きごみ減量、これを他市のいろいろな事例、そういうものもある程度事務局で調べていただきました。それを参考にしながら、ごみ減量の効果を皆さんと議論し、それをもとにどれだけの効果があるか、これぐらいは減らせるであろうという目標値の目安について、ある程度ご了解をいただきたいと思っていますので、よろしくお願ひしたいと思ひます。

2) 北川副委員長よりノーベル賞授賞式に参加した報告及びスウェーデンの環境取組事例紹介があった。

- ・1972年に国連の人間環境会議が開催された場所であるスウェーデンは、環境を学ぶ者にとって原点といえる場所。当時、酸性雨や環境汚染が顕在化し、環境に対する意識が高まっており、この会議で人間環境宣言が採択され、また国連環境計画（UNEP）が設立された。
- ・SDGs進捗度ランキングでは2位に位置しており、フィンランドが1位、3位がデンマークと北欧が上位を占めている。日本は19位。その内容の中にクリーンエネルギーが含まれている。
- ・クリーンエネルギーの特徴として、ごみを輸入して、エネルギーリカバリーで焼却熱を利用している。プラスチックのリサイクル率は高くなく、焼却熱を利用したバイオマス発電が盛ん。そのためあまり埋立てはしない。
- ・戸建ては可燃ごみや生ごみの回収を行い、その他の紙・缶・びん・プラスチックなどは地域のリサイクルステーションとして街中に並んでいるごみ箱で回収する。
- ・生ごみはバイオマスガスに活用。
- ・ペットボトルや空き缶についてはデポジット制度の導入。回収率を高める効果がある。購入するときに1～3クローナ（1クローナ17円）上乗せて支払う。店舗に持っていくとその金額分のクーポンがもらえる。1KRなどのマークがついているものがデポジット対象。マークがないものは公共の場所に設置されている専用回収ボックスに捨てる。
- ・一部のレストランでは、食べ残しを捨てる場所がごみ箱ではなく、はかりの上に乗せられたボウルの中となっていて、その日に捨てられた食べ残しの量の重さが分かるようになっている。利用客への意識啓発に役立っている。
- ・家庭ごみは一般ごみと生ごみの2種類。この2種類のごみを左右で分かれたごみ収集車で一度に回収。生ごみはエネルギーの生成に利用している。この2つのカテゴリーに入らないものはステーションに持ち込むが、落ち葉から家具やベッドなどの粗大ごみまで無料で捨てられる。
- ・食品廃棄を少なくするためスーパーなどで傷みかけたバナナなどを保護者同伴の小さな子供限定で無料提供。
- ・ノーベル化学賞受賞対象となったCO₂や有害物質の吸収などの卓越した技術も、環境面で後世に負債を残さず人類の幸福のために使っていくことが望まれる。

3) 議事 3) の(1)について組合及び各構成市町より、資料に基づいた前回から動きのあった新しい取組について内容の説明があった。

- ・キエーロを一般家庭で小規模で取り組むのはきわめて難しい。冬は外気が寒く、生ごみの分解が進まないため加温する必要がある。それなりの規模があれば外

気の影響が小さくなるため、キエーロはどこかの自治体で集め、かなりの規模で取り組みれば役に立つのではないか。やり方の工夫が必要。

→個人より公民館などある程度集団でやっていくことが必要かもしれない。

- ・生ごみについては食品ロスだけでなく、エコクッキングなど、消費段階の取組も必要。生ごみはもともと食品として購入し、消費をすることで、生ごみになる。アメリカのパークレーではどう購入していくかを最初から工夫する「プレサイクル（リサイクルの前のリサイクル）」政策を展開した。購入段階での啓発。例えばフランスは小さな冷蔵庫しかなく、デリカテッセンが盛ん。そういう面で無駄なものを買う行為が抑制されている。
 - ・自治体は出てきた生ごみをどうするかという政策の話になる。住民が日ごろから心がけて生ごみをどう活用するかとなると、エコクッキングは重要。自治体の中には企業と共同でエコクッキング教室を開催しているところもある。
 - ・フードロス対策として、兵庫県の姫路市役所が「Utteco Katteco」というアプリのサービスを提供している。消費期限近いなどの理由で廃棄予定の食品を、お買い得な値段にする店と消費者をつなぐ。消費者はアプリで出品されたお買い得商品を確認・予約して、店頭で購入する。市民や企業もITを活用するなどすれば、いろいろな形で取組ができるのではないか。
- 外国ではアプリを活用することは多い。店が夕方になると割引情報を流すこともある。泉佐野の団体が提供しているのは、コミュニティフリッジ（コミュニティ冷蔵庫）に自宅で不要になったものを入れておくと、必要な方が持ち帰れる仕組み。ただし目的は子育て世帯の支援。利用者が持ち帰る際に何を持ち帰ったか記録することで、必要なものを把握することができる。食品ロス対策と子育て世帯支援の両方が叶う形の試み。
- ・フランスではスーパーなどから食品ロスが出て、ごみにしてはならないという法律がある。そのため割引をしても売れ残ったものは、契約しているフードバンクへいくら引き渡したかを行政へ届け出る必要がある。そのため生ごみはほぼ出てこない。
 - ・八幡市の環境市民ネットで食べ残しをしないという絵本を作成し、小学生と親のエコクッキングを開催した。特に幼児の食べ残し対策に力を入れている。家庭から生ごみを出さないようにするには、小さいころからの啓発が大切。幼稚園や保育園で紙芝居をしているが、来年度はごみの分別と食べ残しについての内容。食べ残しに関しては食べず嫌いもあるので、家族ぐるみで食べ残しをしないことも大切。ごみの分別は小さいころから取り組むと、大人以上に頑張ってくれる。子供たちから大人への広がりにも期待。
 - ・キエーロはお湯をかけるなど工夫して取り組んでいる。
 - ・宴会では食べ残しが多い。京都市では宴会の最初は30分食べるよう働きかけて、食べ残しを減らす取組を行っている。長野県が盛ん。

(議事(1)まとめ)

- ・提言に取り上げられたテーマに沿い、市町ごとに工夫しながら課題へ取り組んでいる。
- ・フードロスへの取組は、生ごみになる前の仕組みづくりが重要である。

4) 議事(3)の(2)について組合より、資料に基づいた取組内容の説明があった。

- ・宇治市の持ち去り対策がテレビで取り上げられたが、どのような事業なのか。→タ方のニュース等で紹介された。取材は去年の秋。早朝の青色パトロールで、朝の6時半から出勤し、今年度は宇治警察署と連携した。役所の公用車 4~5台、警察はミニパトロールカーで巡回。警察と連携すると効果が高く、発見件数も大きく減少している。
- ・家電、自転車などを持ち去り、売り払っているとそのニュースでやっていたが、その対策として役所に電話をすればそれらの品を取りに来てもらえるとも聞いている。どのくらいの実績があるのか。
→無料臨時資源収集という制度で、令和5年度から試行実施、本年度から本格実施したもの。対象は家電・自転車・ミシン・中学校の制服・羽毛布団・充電電池・食器・金属調理器具。事前予約が必要で、週2回職員が個別収集を行う。今年度は4月から毎月70件程度、1月末までで707件収集を行った。
- 城陽市でも持ち去りが多く発生している。城陽市は民間に収集委託しているため職員が少ないが、年末年始や缶・燃やさないごみの日など時期を見ながら職員パトロールを行っている。発見した場合は指導している。また繰り返し行為は指導件数等も記録している。小型家電については市内公共施設に持ち込める。また今年、衛生センターでは充電式電池の時間外回収用の受付ボックス設置も行い、時間内に持ってこれない方の対応も行っている。
- ・ごみの分別名称を分別意識が向上するものに変えることについて、むかし燃えるごみは生ごみが多く、放置すると伝染病が発生するため、「公衆衛生上、燃やすしかないごみ」であった。しかし現在はごみも多様化。今や「燃やさざるを得なかったごみ」であり、場所によってはごみではなく資源という呼び方をしているので、ごみに対する観念を変える必要がある。
- ・オランダなどではごみを減らすだけでなく、ものを長持ちさせる修理修繕のためのリペアカフェがある。市や環境団体が3Dプリンタを設置し、部品を作って修理を可能にする。専門家が市民を指導するのだが、環境ふれあいひろばでこういった取組を行うのも一つの方向。
- ・コーヒーかすについては、沖縄でスターボックスと共同研究したところ、土壌

改良剤として効果があることが分かった。畑に入れると意味がある。アメリカのスターバックスでは袋に入ったコーヒークラスを持ち帰ることができる。ワシントン州ではガーデニングが盛んなので持ち帰りが多いと聞く。

- ・京田辺の環境団体はコンポストの普及を目的に、JRと協議し、駅前花壇に堆肥を入れる取組を行っている。身の回りでもできることがたくさんあるので、活用方法も視野に入れることが有用。
 - ・ごみ袋については名前を書く取組があり、プライバシーに関わるとして抵抗も大きいですが、採用している団体も多い。透明袋と同じ。ごみの減量に効果があるとは聞いている。また台湾ではごみ山を見かけるが、それは暫定的においているだけで、埋立はしない。焼却残渣であれば、セメントの原料にするなどできるだけリサイクルしている。一般ごみについては海の埋立はやらず、燃やしたのもも再利用という方向性。
- 記名制について、ごみ袋に匿名性が発生するとごみが出しやすくなる。ごみを減らすということは、抵抗を大きくするという事。なぜ名前を書くか住民理解を十分に得ることが大切。例えばごみ袋に「ごみを出さないきれいなまち作りに賛成です」という市民憲章を印刷し、そこに名前を書いてもらえれば、ごみの美化に協力している意識を持ってもらえる。
- ドイツではアウトバーンの下はごみの埋立地。平地が多く身近なところに埋立地を作っていたが、環境に対する意識が高く、自分のところに埋立地を作らないためにはどうしたらいいかを考え、ごみの減量化・リサイクルを進めた。ごみを嫌い他のところへ持って行って見えなくし抵抗を小さくするのではなく、自然環境を汚染しないために見えなくともごみを減らすという考え方。ごみを減らすことはごみを出せる便利さに抵抗を与えることなので、市町は苦慮するし、住民もなかなかできない。抵抗のあることを進めようとしているので、どう抵抗をなくし意識を変えるかが大切。
- ・家庭ごみを減らすために、5月30日をごみの日とし、1週間程度取組してはどうか。またペットボトルと容器包装プラスチックごみを間違っている人が多いように思う。分別が複雑になると判断が難しい。宇治市ではごみ分別辞典というものがあるが、どのように活用しているのか。引っ越ししてきた際にももらえるようであるが、もっと活用してはどうか。
- 自治体によって、ごみ分別基準が異なるが、組合管内では統一されているのか。
- 3市3町の担当課長会議で名称や分別の異なりをどう調整していくかを議論している。開きが大きいのは不燃ごみ。可燃ごみはそれほど異なっていない。
- ・宇治市では中学校の学校給食が始まるが、食べ残しも発生する。給食残渣はどう活用されるのか。
- 城陽市では食品残渣をリサイクルできる業者に委託し堆肥化等を実施している。廃食用油は業者が買い取っている。

(議事(2)まとめ)

- ・海外や国内他団体、組合管内においても様々な環境に対する施策が取り込まれており、手段は一様ではない。ごみ処理技術だけでなくその考え方も日々変化しているため、最新の状況を引き続き調査研究していく必要がある。
- ・住民の意識啓発においても時代に即した内容に変化させる必要がある。ごみの排出を抑制するということは、ごみを容易に出せる便利さに抵抗を与えるということ。現状有している手法を再点検し、再活用することも検討する。

5) 議事(3)の(3)について組合より、資料に基づいた組合における目標の説明があった。

- ・台湾では人口は横ばいまたは減少傾向だが、ごみ量は増えている。宅配利用者の紙ごみが増えた。会議資料では紙ごみは37%と、日本でも紙ごみが増えていると思うが、管内の分別は進んでいるのか。
 - HPに紙ごみの回収ポイントを紹介している。また前回会議の時に委員の方から意見があったが、きちり分けている人と分けていない人の差が大きい。分けていない人に分けてもらう工夫が必要。
 - 紙ごみは古紙のリサイクルだけでは難しさがある。再生紙の需要を増やす必要がある。リサイクルだけでなく、ペーパーレスなどの意識改革も必要。
 - 雑紙の回収は進んでいるのか。雑紙は脱墨が難しく灰色の紙になってしまうが、ドイツでは灰色の紙を使ったノートも受け入れられている。
- ・紙ごみの排出先に悩む。個人情報載っているものは可燃ごみに出したりシュレッダーにかけたりする必要がある。また自動販売機のごみ箱は、捨て口はペットや缶と種類ごとに分かれているが、中は一緒になっている。事業者に聞くと分別啓発のためやっているとのこと。分けられない人に伝えるにはどうしたらいいか。どう考えるべきか。
 - 企業はリサイクルに熱心。機密文書も溶解処理するなどしてリサイクルしている。また日本は分別することからリサイクルが始まるので、自動販売機横のごみ箱の口も分かれている。しかし実際のところ中で一緒になっていても、機械選別すれば問題がない。コストもその方が安いのかもしれない。むしろ家庭ごみなどの異物が入ると問題があるため、入り口が小さくなっている。
- ・さまざまな意識を持った人を一つのやり方に意識付けするのは難しい。一部の人が違うやり方をするとリサイクル全体に影響することがある。

(議事(3)まとめ)

- ・分別に対する個人個人の意識差が大きく、統一することは困難である。
- ・しかしながら、リサイクルを促進するためには精度を上げる必要があるため、

今後も啓発に対する取組を継続・深めていく必要がある。